

I と II のいずれかを選び、解答しなさい。

I 次の新聞記事は、姫岡とし子東京大学名誉教授（西洋ジェンダー史）へのインタビューをもとにしている。歴史教科書のジェンダー記述が主題として取り上げられている。内容を踏まえて下記の設問に答えなさい。

この部分は著作権の都合により公表できません

この部分は著作権の都合により公表できません

（「女性含まぬ「普通選挙法」100年、現在地は」『朝日新聞』2025年6月29日朝刊(Web版)）

この部分は著作権の都合により公表できません

問 1. 下線①で研究者たちが「普通選挙法」ではなく「男子普通選挙法」ではないかと指摘しているのはなぜか、200 字以内で説明せよ。

問 2. 下線②について、図①にあげた 17 世紀に描かれたルイ 14 世と図②にあげた 19 世紀に描かれたビスマルクの肖像画を比較してなぜこのように違うのか、男性らしさという言葉を使用して自身の考えを 600 字以内で説明せよ。

Ⅱ

次の文章は、昨年（２０２４年）、ある新聞の「声」欄に寄せられた読者の意見のいくつかをとりまとめたものである。（一部省略した。）これを読んで、以下の問いに答えなさい。

この部分は著作権の都合により公表できません

この部分は著作権の都合により公表できません

朝日新聞デジタル 2024年11月20日 東京 朝刊 オピニオン2
(一部省略)

問1. 下線1について、その要因を2つ考えて、枠内に簡潔に記しなさい。(資料のなかで事実上指摘されているものは除く。また、類似したり関連性が強いものは1つと判断する。)

問2. 田原さんと西村さんは、留学(滞在)した国は違うが、似たような困難や戸惑いを感じていたようである。どんな困難や戸惑いだったか、150字以内で簡潔にまとめなさい。

問3. 竹中さんと澤内さんが述べている留学の意義を150字以内で簡潔にまとめなさい。

問4. 上記4人の意見、とくに竹中さんと澤内さんの意見は、留学するしないに関わらず、国際交流や異文化理解を行う上で、重要だと思われる。この二人の意見をも参考にしつつ、国際交流や異文化理解に関わる活動を考案するならば、あなたは、どのようなことをしてみたいと思いますか。その理由も合わせ、具体的に述べなさい。

(500字以内)

I

問 1. (記述例)

「普通選挙」とは、「制限選挙」の対にある。この定義にしたがえば、一定の年齢に達したすべての国民に選挙権を認めるのが「普通選挙法」であるはずである。しかし、1925 年の「普通選挙法」は当時の成人男性のみを対象としており、人口の半分を占める女性が完全に除外されている。女性の存在を無視するかのように「普通選挙法」と教科書で記述されているため、「男子普通選挙法」ではないのかと研究者は指摘しているのである。(194 字)

問 2. (記述例)

図①のルイ 14 世の肖像は、現在の感覚での男性らしさは感じられない。恐らくかつらだと思われるが、長いカールのかかった髪の毛は女性らしく見える。顔も髭などはなく、表情もどことなく優し気である。服装も豪華であるがきらびやかで装飾が付いていてこれも男性らしくない。一番違和感のあるのが足で、白っぽいぴたっとしたタイツをはいていてクロスさせた細い足も女性っぽい。靴もハイヒールのようなかかとのある靴でリボンのようなものも付いている。ルイ 14 世は絶対王政期の君主であるので当時の理想的な君主像が繁栄されていると思われる。17 世紀は男性、女性の区別よりも宮廷人らしさが重視されていたと考える。それに対して図②のビスマルク像は対照的である。髪の毛は短髪で非常に目立つ立派な髭をはやしている。体も大きく堂々としており仁王立ちで立っている。着ている服は軍服であり、ビスマルク以外の人物たち（全員男性）も皆同じような軍服を着ているのが特徴的である。現在私たちが思う男性らしさに近い。では、これらの絵が描かれた 17 世紀と 19 世紀の間に何があったのか。フランス革命以後、近代国民国家が形成されてゆき、今までお金で雇われていた国の軍隊が、徴兵制に基づいて男性国民全員が参加するものになった。それにより、国家に奉仕する軍隊に参加することが男性国民全体に求められることになり、立派な軍人になることが男性らしいとされるようになっていった。このような男性らしさは近代以降でも通用していると言えよう。(599 字)

【出題意図】

高校世界史教科書のジェンダー記述の変化について、その歴史を踏まえて文章を正しく読解する力をはかるとともに、肖像画を比較して 17 世紀と 19 世紀でいかにジェンダー観が変化したかを捉え、19 世紀の「男性性」が強化について論述する力を問う。

Ⅱ

問 1.

円安、物価高、低賃金、低収入、貧困、困窮、訪日外国人の増加、外国（人）イメージの悪化、などから2つ

問 2. (記述例)

困難としては、外国語（現地語）で仕事の指示を受けるなど、外国語だけの環境に想像以上に追い詰められた。違和感については、日本のように察する文化や空気を読んで行動することはなく、自分がどうしたいかを毎回確認されたり、自分の主張を大事にすることが当然であった。(127字)

問 3. (記述例)

留学先で多国籍の留学生と交流し、多様な価値観に触れたことで、世の中の出来事を「自分ごと」と捉えられるようになった。外国で、日本という国を客観視し、自分の価値観を見つめ直せた。相手の意見を否定する人や意見が大きく異なる人もいたが、そうした人に対し、寛容に接することができるようになった。(142字)

問 4. (記述例)

私は、大学入学後、もし可能なら、留学などの海外経験をしてみたいと思うが、まだ具体的には考えていない。そこで、日本国内でできる国際交流・異文化理解の活動として、日本に來ている留学生たちを支援するボランティア活動を行ってみたいと思う。具体的には、留学生と日本人の若者が、ちょっとしたゲームをしたり、簡単な料理を作って、食べ物や飲み物を囲みながら、留学生の日本での生活の苦労や問題などを話してもらい、解決や改善について考えてみる、というものである。どうしてこれを思いついたかと言うと、外国で生活することは、苦労や心配も多く、場合によってはその国に滞在することを断念せねばならなくなることもあるので、そうならないよう受け入れ側が支援することが必要だと思ったからだ。なお、相手の相談を聞く際は、じっくりと聞いてあげることが大事だろう。そうすれば、竹中さんが言うように、外国人の問題であっても、自分ごとと捉え、自分を見つめ直せるなど、教わることがあるかもしれない。だからこそ、相手にアドバイスする際には、澤内さんが言うように、価値観を押しつけず、寛容に接する必要があると思う。(482字)

【出題意図】

留学についての新聞記事を材料として、文章読解力を問うことに加え、国際文化の学びのなかで重要なテーマである国際交流や異文化理解についての思考力、作文力を問う。